

## シリーズ/石に命を吹き込む長岡兄弟

# 五劫の間、思惟・修行により螺髪が肥大化 浄名寺型「五劫思惟阿弥陀如来座像」(愛知県西尾市)

彫刻家  
長岡和慶



巨大な髪型が印象的な五劫思惟阿弥陀如来座像。無限に近い間、思惟・修行により螺髪が伸びて如来となった姿を表す。本体と上蓮華が一つ石で、高さは合わせて4尺1寸。基礎台座を含めた総高さは6尺6寸2分となる

愛知県岡崎市の石彫家で大仏師の長岡和慶師が制作した「五劫思惟阿弥陀如来座像」が、このほど西尾市の浄土宗阿弥陀山浄名寺(第七世・松原辰也住職)に建立された。衆生救済のため無限に近い間、思惟・修行により螺髪が伸びて肥大化したとされる珍しい髪型の阿弥陀様だ。施主は安城市在住の女性篤信家親子。先祖供養として、当初は浄土宗の宗祖・法然上人像を希望していたが、同寺の松原紗蓮副住職の望みで再検討し、五劫思惟阿弥陀像の建立となっ

た。後日、京都・金戒光明寺にある同石像(江戸中期)の写真入り資料を副住職から授かった。「無量寿経」によると、法蔵菩薩が阿弥陀如来になる前の久遠の昔、衆生救済のため四十八の大願を立て、五劫もの長い間、座禅し、思惟を凝らしていた。「たとえ、この身を苦しみや毒の中に留め置くと、一切衆生を救うため精進し耐え忍び、決して後悔はしない」と誓願し、菩薩道を極め続けた。その間、剃髪することなく、伸びた髪は神通力でぐるぐるに巻き上がり、このような螺髪を積み重ねた頭になったという。

なお、五劫の「劫」は、仏教における時間の最長単位。由来は諸説あるが、四十里四方の岩山を天女の羽衣で百年に一度撫で、岩山を完全に磨滅し尽くすのに要す時間を一劫とし、その五倍が五劫とされる。古典落語「寿限無」にも「五劫のすり切れ」として登場する。

和慶師が調べたところ、五劫思惟阿弥陀如来像は、全国に少なくとも十六体あった(和慶師も過去に一体制作し、神奈川県三浦市の三樹院に納仏している)。そのうち代表的な八体を選んで、それぞれの制作年代や造形的特徴、印相、大

きさなどを調べたところ、先の金戒光明寺像は、奈良・五劫院像(鎌倉時代)と同じように両手を袖下に隠した状態で定印を結び、衣文の表現もまったく同じだった(おそらく五劫院像の模刻と見られる)。ただ、和慶師はその模刻ではなく、浄名寺型の像を目指すことにした。

また別の仕事で京都へ行った際、早起きして金戒光明寺像を探寸したところ、その本体と上



新型コロナの影響で規模を縮小して行なわれた開眼法要のようす

蓮華を含めた高さがすでに発注した原石(榎鈴木石材探掘の豊田市産「花沢石」と同じだった)で驚いた。そのため、施主とお寺の許可をもらい、上蓮華の厚さを低めにし、本体を二尺五寸から三尺五寸に変更した。原石は深見石材店で不要部分を石切りした後、アトリエに届けてもらい、昨年十一月月上旬より本体の制作へ入った。

今回制作した浄名寺像は、印相を袖下に隠さず、定印がはっきりわかる像容とした。如来の特徴を表す三十二相八十種好に倣って、肩の肉付きをよくした豊満な姿(第二十一相「肩肉好相」とし、指の間に水掻きのような膜(第五相「縷網相」=衆生を漏らさず救い上げる象徴)をつくった。衣(衲衣)は髪を整えて浅く彫り、布地が肌にピタリと張り付くように表現した。そのため衣文の流れや裳懸座など既存のものとは異なる像容となり、和慶師ならではの試みが随所に見られる浄名寺型として完成した。

制作途中、施主と副住職が来房したとき、螺髪を強調するため体形を細身にし、顔も小さくしたいと要望があったので、逆三角形の菩薩面相とならぬよう細心の注意を払いながら、その

場で可能な限り希望に近づけ如来面相を保った。その後、本体を仕上げから、反花台座と基礎台座を制作した。基礎台座に彫る「建立の銘」は、施主が文面をまとめ、(有)三矢刻字店に仕上げてもらった。

完成した翌月、今年四月八日の据え付けが決まり、搬入当日、尊像一式をトラックに積み込み、深見石材店の深見光男社長と一緒に浄名寺に到着すると、近所の年輩女性が早々とその存在に気づいた。それが五劫思惟阿弥陀如来座像だとわかると、「すごい仏像が来た。京都の金戒光明寺にあるのと同じだ」と慌てたようすで近づいてきた。聞くと、その女性は、金戒光明寺像の線仏画が描かれたお札を自分の携帯電話に貼るほどの大ファンで、「これで京都に行かなくても毎日お参りできる」と感激していた。

開眼法要は同月二十三日、施主・関係者が見守るなか、松原副住職を導師として厳修された。

◎長岡和慶

愛知県岡崎市東牧内町字堤外60・1

TEL 0564・32・2335

E-mail: mite33n11@yahoo.co.jp